令和５年度保育・子育て総合研究機構委託研究「ナショナル・カリキュラムに関する調査研究」研究成果報告書について語る会

参加者　＊敬称略

久保健太　大妻女子大学准教授、研究企画委員会外部委員
伊集守直　横浜国立大学教授、研究企画委員会外部委員
山本一成　滋賀大学准教授、研究企画委員会外部委員
島本一男　東京都・諏訪保育園園長、保育・子育て総合研究機構代表
齋藤紘良　東京都・社会福祉法人東香会理事長、研究企画委員会委員長
鈴木秀弘　千葉県・和光保育園園長、研究企画委員会副委員長

【前編】

研究成果報告書から考える保育と社会システム

鈴木秀弘

齋藤紘良

島本一男

山本一成

久保健太

伊集守直

保育・子育て総合研究機構では、令和５年度からの３年間にわたり、久保健太氏・伊集守直氏・山本一成氏の３名の研究者をお迎えし、「ナショナル・カリキュラムに関する調査研究」に取り組んできました。その研究成果として、リーフレット「希望の保育指針」（「保育通信」２０２６年３月号付録）をお届けし、このたび研究成果報告書「希望の保育指針―自分たちの手で自分たちの暮らしをつくる」を刊行しました。

この語る会は、報告書をもとに、研究者３名と研究企画委員会委員が２回（前編・後編）にわたり語り合った記録です。報告書に込めた思いや委員からの率直な意見など、報告をより深く味わうための内容が詰まっています。ぜひ、報告書と併せてご一読ください。

【研究成果報告書】
希望の保育指針
―自分たちの手で自分たちの暮らしをつくる
第一部：希望の保育指針が目指したものと、今後の展望（久保健太）
第二部：希望の保育指針の内容および現行の保育所保育指針との関係（山本一成）
第三部：希望の保育指針を支える社会のあり方（伊集守直）

社会の中で保育をどう捉え直すか

―研究成果報告書が提示する新たな視座

伊集●報告書では第三部を執筆しました。少しわかりづらいかもしれませんが、まとめのポイントは、神野直彦先生の「サブシステム論」[*1]の視点を用いながら、社会全体（政治・経済・社会／国家・市場・共同体）という大きな枠組みの中で、保育や子育てをどう位置づけるかという視座を提示した点にあります。スウェーデンなどの事例を紐解くと、単に困窮者を助ける「福祉」や親の就労を支える「就労支援」という狭い意味にとどまらず、子どもを中心に据えた社会構造全体の広がりを持って制度を発展させてきた歴史があります。

日本の現状に目を向けると、子育て支援や保育の充実はどうしても少子化対策や、親の就労支援といった経済的・実用的な効果ばかりで評価されがちです。しかし本来は、社会全体のインフラ・根幹そのものとして子育てを位置づけ直す視点こそが求められているのではないでしょうか。今回は具体的な制度設計の細部まで踏み込むというよりは、「社会全体のつながりの中で保育をどう捉え直すか」という大きなフレームワークを提示する形でまとめています。

山本●伊集先生が書いてくださった方向性はとても大事です。どうしても経済的な観点から保育を考える政策が多いですが、社会的観点から考えるということが「民主主義」につながるということがよくわかります。さらに、スウェーデンを通して具体的な数字も示されるので、「希望の保育指針」のリーフレットを社会的に位置づけることができると思います。

久保●私も同感です。経済システムだけではなく、政治や社会の担い手として人間を見るということはとても大事です。ですから、伊集先生にこの辺りを書いてもらえたらいいなと思っていました。２０２７年１月開催の保育総合研修会でも、この辺りの話をお伝えできればと思っています。

最近、ユースワークに取り組むスクールソーシャルワーカーの方々と勉強会を重ねています。スクールソーシャルワーカーの方々によると、現代の若者は「自らを経済的な合理性や効率性で測り、その結果として自己評価を下げる傾向がある」とのことでした。

私は、保育の場だけでなく「保育的な視点から人間を捉えること」が非常に重要だと考えています。神野先生の論のスケールをさらに広げていくと、山本先生が言われる「生きているもの同士」という視点にもつながります。政治システムや経済システムでも「社会的存在としての人間」という側面はある程度考慮されていますが、山本先生や私の立場は「人間は社会的存在であると同時に、生命体でもある」という人間観に基づいています。

神野先生の発想は、社会システムの内側から自然と立ち現れてくるような印象を受けます。ここで言う社会システムとは、コミュニティの担い手であると同時に、一つの生命体でもある存在です。神野先生の考えを取り入れることで、保育の枠を超えて、ユースワークや学校教育といった幅広い領域へも議論を展開できるようになります。

伊集●具体的な制度の設定論や財源についても言及が必要であったと考えますが、大きな視点として捉えていただきたいです。また、その点は共感していただける部分も多いのではないでしょうか。

「ただのおしゃべり」を支える社会へ

―日常の豊かさを取り戻すためには

■「ただのおしゃべり」の必要性と、保育・教育を支える制度的責任

久保●スクールソーシャルワーカーの方曰く、「自分たちは一日おしゃべりしているだけ」だそうです。ただ、その「おしゃべり」をすごく大事なものと捉えています。教育という場所で、人とのつながりをうまく持てずにいる子どもたちは、教室でキャラ付けされてしまったり、部

活で活躍しているかであったり、成績はどうかであったり、その子そのものの魅力ではなく、何らかのフィルターを通した人同士のつながりしか持てません。その中で、何となく生きづらさを抱えている子どもたちとただおしゃべりしている。でも、この「ただのおしゃべり」が大事です。保育者でもない、研究者でもない、父親でもない、一人の自分に戻っていく。

私たちはそういった時間を居酒屋で持つことができますが、ティーンエイジャーはそうはいかないので、スクールソーシャルワーカーとそういった時間を過ごすのです。私もそうですが、生の自分に戻る時間がないと生きていけない人も多いのではないでしょうか。

これはＮＰＯなどが実践している「特定のテーマを持った対話」とは少し性質が違って、「ただのおしゃべり」の持つ力だと言えます。「対話ではない、ただのおしゃべりが必要」ということは、すごく保育と重なっています。

関連して、村上靖彦さん著の『生き延びるための会話』（ＳＢクリエイティブ、２０２６年）を思い出しました。福祉の本ですが、城先生（研究企画委員会委員、後編にご登場）がされているような子育て支援や母親支援、スクールソーシャルワークとかなりつながりがあります。「ただのおしゃべり」は、神野先生では社会システムに入っていくと思います。スウェーデン等では保育者がただおしゃべりをする時間（フィーカ（Fika））[*2]を持っています。コーヒーとケーキで、昼下がりの一時をおしゃべりに費やす。ああいった時間を日本の保育者にも与えてほしい、その財源を確保してほしいということを、伊集先生のお立場から、研究成果報告書の延長上で出てくるのではないでしょうか。

伊集●そう思います。ただ、そういう税負担などを伴う財源確保に関する具体的な主張をすると、強い反発も覚悟しなければいけません。

久保●スクールソーシャルワーカーやユースワーカーや、村上さんが取り上げている福祉の人たちに、ただのおしゃべりが大事と思っている人はいっぱいいて、そういう人たちとうまく手を組みながら進めることができないでしょうか。文化人類学の奥野克巳さんも同じ仲間かもしれません。

伊集●私の専門外ですが、「学校」自体が、社会システムというか共同体の延長的な機能を持たないといけないのではないでしょうか。現在は経済システムに絡めとられ、労働者を育てていくための過程が始まっていくというふうになっているので、「保育園・幼稚園の時はいいが、学校に入ったら大変」となってしまいます。

スウェーデンがよい例で、「その子たちがその子たち自身でいい場所」として教室があります。保育だけではなく、その延長としてケアという機能を持った「教育」「教室」につながっていかないといけません。そこを支えていくのが、教員であり、ソーシャルワーカーです。子どもたちの学びやおしゃべり、それを担っている人たちの労働環境もあります。人はつけないといけないし、制度や予算はどうするのかという話になります。

久保●保育の専門性を、経済に回収されない形で主張する根拠になると思います。保育は人を育てるという側面もありますけれど、それだけではありません。

島本●私は、このままだと保育という仕事に対して魅力を感じることが難しくなり、今以上に保育士不足が深刻化するのではないかと危惧しています。

報告書の「政府が制度的責任を強化する」という部分は、少し説明が必要かもしれません。「質」や「専門性」という言葉で、現場の負担が高まっている気がしています。政府が責任を回避するために、あちこち制度を整えているようにも見えてしまいます。家族の負担を減らすことは重要ですが、その分のシワ寄せがすべて保育現場に向かっている現状には違和感を覚えます。そうした流れを保育に求めるなら、それを支える構造的な変革を根本的に再構築する必要があるはずです。

伊集●以前、「希望の保育指針（Room2：問いにもとづく）」の議論において、「子どもを観察しながら問いを立てるプロセスには、保育者だけでなく研究者の伴走も必要だ」という話が研

究企画委員会でありました。

スウェーデンやドイツでは、こうした実践に必要な学習課程と実習が教育制度として組み込まれており、時間をかけて専門性を育む仕組みが存在します。もちろん、ドイツのように（特に中等教育課程の）教員に2つの専門教科を課すことで人手不足が生じるといった課題もありますが、高い専門性を担保するためには必要なプロセスと捉えられています。

一方、日本で人手不足が生じた場合、間口を広げることで担い手を増やそうとする傾向があります。一定の教育や試験で資格は取得できるものの、「専門性がどこまで担保されているのか」という課題は残ります。大学での履修を必須とするなどの制約を設ける方法もありますが、人材確保との兼ね合いで厳格化が難しければ、「入職後の研修を通じたステップアップ」などを組み合わせる柔軟な設計も考えられます。

ヨーロッパでは、専門性を身につけるための進学や研修にかかるコストは制度的に補償されており、個人の負担はほとんどありません。「子どもと向き合うための高い専門性には時間も費用もかかる。だからこそ、その負担は社会全体で引き受ける」という思想が根底にあるからです。「子ども一人一人を中心に支えるために、社会がどこまで責任を引き受けられるのか」。まずはこの理念に合意し、どのように具現化していくのかを検討していく必要があります。

山本●川田学先生が著書『保育的発達論のはじまり―個人を尊重しつつ、「つながり」を育むいとなみへ』（ひとなる書房、２０１９年）で、人口減少社会で子どもの数が減っているからこそ、既存の枠組みを超えた園や学校の仕組みが必要ということを提言されていました。この発想も日本にはあまりありません。人が少ないので園を減らす、効率化するという、既存の仕組みを前提としたことではなく、むしろおしゃべりができるようなつながりの時間が必要だと感じます。それを人口減少と絡めて考えていくことはできるかもしれません。

伊集●子どもが減っている状況で、さらに教育の機会が親の経済的状況に依存してしまうと、チャンスを掴む人がさらに減っていくため、このような仕組みは社会全体の戦略としてよくありません。人口が減少しているからこそ、すべての子どもに均等な教育機会を保障することが国家戦略として重要になります。

島本●私の地域では小中一貫校が人気で子どもたちが集まっていますが、特定の学校に人を集めると、周辺地域からはどんどん人がいなくなってしまいます。社会が一極集中を生む仕組みを自らつくってしまうことで、地域で「のんびり豊かに暮らす」という選択肢が奪われているのではないでしょうか。また、効率や競争ばかりが求められる環境では、自ら考え、自己決定をしながら生きるといった余白のある学びは、今の子どもたちにとってさらに難しくなっていると感じます。

■個別化するスマホ時代における日常の豊かさ

久保●スマホがさらにそれを奪っているように思います。やっぱり空を見るよりもスマホを見てしまいます。例えば、私たちが集まると来た人からおしゃべりを始めますが、大学のゼミの学生たちは集まってもおしゃべりを始めないで、一人一人がスマホを見ています。「暑いね」等の簡単なおしゃべりをせずに、スマホを見ているというのは10代の過ごし方としては気になります。保育者の研修をしていても、休憩中にずっとスマホを見ている人もいます。スマホが奪ったものは大きいです。

齋藤●うちの法人・東香会をつくった祖母が「必ず家庭に中心をつくりなさい」という言葉を遺していきました。おそらく、70年代～80年代はテレビが中心だったのでしょう。わが家では音楽システムが中心で、それをもとにして家族で会話が生まれます。テレビを見ていても、昔は一緒に笑ってあーだこーだ話せていたけれど、この15年くらいは個人主義がデフォルトになっています。そこから変えるというのは、かなり難しいように思います。

島本●それを「取り戻す」ではなく、「もっと

楽しい生き方があるのではないか」と提案したいですね。

久保●個別化していくことが悪いことではないですが、長女が小学校4年生になって、意識的に中心をつくっていかないと思っています。なので、うちではかなりボードゲームをしています。紘良先生の家に行って、実際にレコードプレーヤーを買おうかとも思いました。レコードの台に置いて、針を落としてみんなで聴くというのは、YouTubeで検索するのとはまったく違うものでした。

齋藤●仕事帰りに、たまたま本屋さんでレコードのセールをしていて大滝詠一のレコードを買いました。それを今朝置いておいたら、「お父さん、大滝詠一どうしたの?」と息子に聞かれ、そこから会話が生まれました。たかだか5分か10分の会話ですが、それが積み重なるというのはとても贅沢な時間です。

鈴木●「家族の中心がレコード」であった今の話を聞いて、わが家で置き換えて考えてみると烏骨鶏や蜜蜂だと思いました。今は土用ですが、この期間に動物は変な動きをします。獣が動くから、烏骨鶏がやられてしまう。春の土用もやられたし、今回も「土用だった!」みたいな。

うちの烏骨鶏は、追い立てるとなかなか小屋に入ってくれないので、鶏たちが夜に自分で入ったら鍵を閉めに行きます。その日も「小屋に入っているな」と思って鍵を閉めたら、私がお酒を飲んでいたのもあるけれど（笑）、6羽いるうちの5羽が入っていなかったみたいで。でも気づかずにそのまま寝てしまったんです。そしたら、夜中に「キャキャキャキャ」みたいな声がして、結局、外にいたうちの1羽が獣にやられていました。そのことが翌朝の家族の話題になります。「昨日の夜、大変だったんだよ」「誰がやられた」「何時にやられた」とか。家族中で見に行って、「これはアナグマだな」とか、あーだこーだ話をします。こういった何気ないことに、すごく価値があるということを再認識しました。

さっき島本先生が、「集まるところをつくると、周りが過疎化していく」と言っていました。本当にそうだと思います。うちのお寺の中に池を作ろうかという話になっています。生物多様性に寄与したいという思いや、地域の中のホタルが減ってきているので、お寺周辺に元々いたホタルのDNAを残したいと動き始めています。生態の専門家に見てもらいながら話を聞いていましたが、「1つ池を作るだけでは、そこに集中してしまうのでダメ。できるだけ、2つ、3つ作った方がいい。しかも、少し特性が違う池にする。日なた寄りにしたり、日陰にしたり、池に注ぐ流れが強かったり弱かったり。1つ大きな池を作るのではなく、似て非なるものをいくつも作る。そうすると、居心地よさの違いでもっと多様になっていく」と教えてくれました。

保育自体も3つのサブシステムが重なるような1つのモデルをつくるというよりも、もっと多様なものの創発が起こるようなモデルでつくっていかなければいけないと思いました。

齋藤●集まること自体が問題なのではなくて、集まった後に解散できることが大事ですよね。

[註]

★1　サブシステム論（神野直彦）：経済学者・神野直彦氏が提示する社会構造モデル。社会全体を「政治」「経済」「社会（生活・共同体）」などの部分体系（サブシステム）の相互関係として捉え、人間生活や福祉・保育を単なる経済活動に従属させず、独立した重要な社会的基盤として位置づける理論。

★2　フィーカ（Fika）：スウェーデンの習慣で、甘いお菓子やコーヒーを片手に家族や同僚と休憩・雑談を楽しむ時間。単なるお茶の時間ではなく、コミュニケーションを円滑にし余白を生む文化として重視されている。

保育・子育て総合研究機構研究企画委員会

https://www.zenshihoren.or.jp/activity/kenkyu.html